



歴史の読み方について : ギンズブルグ『歴史を逆な でに読む』を読む

樋口, 大祐

(Citation)

倫理創成講座ニュースレター, 3:14-18

(Issue Date)

2005-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001716>





歴史の読み方について——ギンズブルグ『歴史を逆なでに読む』を読む

樋口 大祐（国文学）——「マイノリティ文化論」担当

1. はじめに

本稿では、イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグ（Carlo Ginzburg）の論集『歴史を逆なでに読む』（Leggere la storia in contropelo）（上村忠男訳、みすず書房、2004年）を読むことを通して、21世紀における文化・歴史研究と「倫理」の関係について考察して見たいと思う。

「歴史」という概念を「逆なで」という、やや異様な（人に緊張感を与える）響きを持つ言葉と最初に結び付けて使用したのは、ドイツのユダヤ系批評家ヴァルター・ベンヤミン（正確にはその翻訳者野村修）である。彼は1940年、ナチス占領下のフランスを逃れて亡命の旅の途上、スペイン国境の小さな町で官憲に拘束され、自殺する。そのとき彼が携えていた遺稿『歴史の概念について』の中に、以下の文章が含まれている。

いつの時代でも支配者は、かつての勝利者たち全体の遺産相続人である。（中略）こんにちにいるまでの勝利者は誰もかれも、いま地に倒れているひとびとを踏みにじてゆく行列、こんにちの支配者たちの凱旋の行列に加わって、一緒に行進する。行列は、従来の習慣を少しもたがえず、戦利品を

引き廻して歩く。戦利品は文化財と呼ばれている。〔中略〕それは、その存在を、それを創造した偉大な天才たちの労苦に負っているだけでなく、作者たちと同時代のひとびとのいいしれぬ苦役にも、負っているのだ。それは文化のドキュメントであると同時に、野蛮のドキュメントでもある。そして、それ自体が野蛮から自由ではないように、それがひとの手から手へつぎつぎと渡ってきた伝達の過程も、野蛮から自由ではない。だから歴史的唯物論者は、できるかぎりこのような伝達から断絶する。かれは、歴史をさかなですることを、自己の課題と見なす。(Ⅶ. 野村修訳『ベンヤミンの仕事2』岩波文庫、所収)

ここには、穏健な人々の眉をひそめさせるような過激さがある。しかし、文化財を「文化のドキュメントであると同時に、野蛮のドキュメントでもある」とする彼の定義が人口に膾炙しているのは、そこに歴史と人間（あるいは過去の人物と現在生きている我々）の関係を考える時にゆるがせに出来ない「倫理」的な関心が含まれているからだと思われる。

ギンズブルグは『歴史を逆なでに読む』の日本版論集の序言でこの言葉を引用した後、これを「証言の音域を拡大して、特定の史料が生産された地平の内部に閉ざされたままでいるのを避けようとする、歴史家たちの傾向」と結びつけている。しかし、彼はモンテーニュやピカソをも、伝統を「逆なでに読んだ例として挙げており、ことは必ずしも歴史家に限ったことではなさそうだ（ベンヤミン自身、大学の学問の世界からから排除された「文士」だった）。歴史や伝統を「逆なでに読む」とは、具体的にどのような意義を持ちうる行為なのか。以下、ギンズブルグの論点を整理しながら考察してみたいと思う。

2. 第一の論点・歴史叙述とフィクション

『歴史を逆なでに読む』は、いわゆる「言語論的転回」以後、歴史叙述における物語的次元を重視する潮流が強まってきた思想状況の下で、歴史叙述における認知的な可能性について、多角的に論じたものである。主な論点は三つある。第一は歴史叙述とフィクションの関係、第二は歴史叙述と「現実」（物自体）との関係、第三は歴史や伝統を「逆なでに読む」ということ、その具体例と意義についてである。

まず、第一の論点について。ギンズブルグは、「歴史の語りとフィクションの語りとの関係は、歴史的には、ひとつの競合関係としてのかたちをとってきたのであり、そこでは対立と混淆、カテゴリーと方法手続きの面で相互交換が繰り返されてきた」（序言11頁）と指摘し、両者の関係を歴史的に分析する。ヨーロッパでは、固有の文学ジャンルとしての歴史叙述が誕生する際、ホメロスの叙事詩が大きな影響を与えており、「歴史家は、読者を感動させ納得させるためにエナルゲイア（生き生きした印象—樋口注）を用いつつ、自分の提示することを真実として通用させるのだ、というのが古典古代の考え方であった」（59頁）「真実とはなにをおいても説得にかかわるものであつ

たのであって、現実についての客観的な証拠とは副次的な関係しか持っていなかった」(65頁)。しかし、このような歴史叙述とは別に、古遺物研究の伝統もあり、「近代の歴史叙述は、それぞれ古典古代の歴史叙述と古遺物研究とに基礎をおいた、二つの異なる知的伝統が収斂したところで誕生し」(67頁)、また「年代記の伝統」(同上)が両者の「あいだに事実上の橋を架けることで重要な役割をはたしていた」(同上)。異なる二つの知的伝統が収斂したことは、どのような結果をもたらしたのだろうか。ギンズブルグは「真実の探求作業は、均質な文体をもつ洗練された言説にはうまく適合できない」(73頁)と、歴史叙述において調和的な構造が破壊されたことを肯定し、「引用がエナルゲイアに取って代わったのだ。これは、バフチンの用語を借りて、独白的態度にたいする対話的態度の勝利として描くことのできるような、運命的な勝利であった」(74頁)と評価している。ギンズブルグはここで、一般にモノローグ的なものと見なされることの多い歴史叙述に、「引用」という形式の対話的契機が存在することを喚起し、世界認識の方法としての歴史叙述の可能性を解き放とうとしているのではないだろうか。

しかし、歴史叙述を豊かにしうるものは「引用」だけではない。ギンズブルグは文体を対称の貴賤に対応すべきものとする古典古代の文体規範が崩れていく先に「小説」の誕生を展望し、「異常な年代記的事件の報告や遠方の国々への旅の記録が小説の誕生に」(30頁)寄与した可能性を示唆する。また、18世紀イギリスの小説家フィールディングが、一律な時間進行の形式から縁を切って、物語の時間を凝縮したり拡大したりすることを、『反乱の歴史』の著者クラレンドンから学んだことを指摘し、小説の誕生における歴史叙述の重要性を力説する。その後、バルザックのような小説家が自身の作品に従来の歴史叙述に匹敵する重要性を付与するようになっていくのだが、ギンズブルグは、「歴史家たちが十九世紀の偉大な小説家たちの放った挑戦状を受け入れ、(中略)それまでなおざりにされていた研究分野に立ち向かうようになるまでには、一世紀を要した」(38頁)と、それら認知的な機能をもつ小説を、ここ数十年の歴史研究を先取りするものとして高く評価している。もちろん彼は文学作品を、当時の「現実」を反映する透明な媒体とみなしているのではない。彼は小説という言説形式が持ちうる、対話性、視点の複数性、時空の重層性等の性格を、歴史叙述の方法として積極的に取り込もうとしているのだと考えることができよう。

3. 第二の論点・歴史叙述と「現実」(物自体)

一般に、指示対象としての「歴史的事実」を前提としない小説さえも認知的に読もうとする彼の志向は、恐らくテキストの外部としての「現実」への緊張感から来るものであろう。ここから、第二の論点が引き出される。彼は歴史叙述の物語的次元の重視が、その「現実」との関係性を捨象し、全てを物語的機能のうちに回収してしまう傾向を持っていることに対し、口を極めて批判している。

「現実原則（中略）の惹起するもろもろの軋轢によってこそ、歴史家たちは、ヘロドトス以来、広く「他者」をわがものとするをなしてきてきたのであった——あるときにはその「他者」を馴致することによって、またあるときには逆に自分たちの出発点にあった認識図式を根底から修正することによって」（41頁）「現実をテキストとして理解せよという流行の命令は、どのようなテキストもテキスト外的な現実への参照なくしては理解されえないという自覚によって、補完されるのでなくてはならない」（85頁）。ギンズブルグの父親はユダヤ系の反ファシズム活動家として獄死しており、彼のテキスト自身、まさにこの「現実」と無関係ではないが、この論点は文化史研究のスタンスに対する一つの問題を提起している。たとえば過去の人物・事件について物語った魅力的な歴史叙述が、当該人物・事件を大きく歪めていると判断される場合、「物語は事実とは違うのだ」という理由でそのことに頬かむりすることは学問的だろうか（特にそれが「文化財」としての地位を持つテキストである場合）。文化史研究は「過去の人物・事件の言説化されていない部分と、どのような対話的關係を結びうるか」という問いを包摂しえてこそ、より強靱で開かれたものになりうるのではないか。

4. 第三の論点・歴史を逆なでする読み

第三の論点は、歴史・伝統を「逆なでに読む」ことの意義についてである。ギンズブルグは「魔女の嫌疑で告発された女や男たちの信仰内容、そしてあったとすれば行動様式」（7頁）への問題関心から歴史研究を始め、15～17世紀のフリウーリ地方で行われた異端裁判に関する膨大な資料に出会ったのだが、それらの資料は「迫害を目的として生産され利用されてきた」（7頁）ものであった。そこで彼は「史料を逆なでに読むすべ」（8頁）、すなわち「それらを生産してきた者たちや利用してきた者たち——一方では異端裁判官と裁判所の書記、そして他方では〔中略〕弁護人と被告——の意図に逆らって読むすべを学ばなければならなかった」（9頁）のである。彼は「裁判官たちと被告たち相互の文化の場における意思疎通の欠如が、逆説的にもあるひとつの正真正銘の対話——抗争状態にある声同士の解決されざる衝突という、バフチンの提案している意味での対話——の出現を可能にしているようなケース」（146頁）に注目する。そして、テキストの中から、「裁判官たちの期待によって汚染されていない被告や証人たちの声」（13頁）を探し出そうとするのである。

著者が再三バフチンに言及していることは、「歴史を逆なでに読む」読みが、小説の可能性をその対話性・多声性に見出そうとするバフチンの志向と親縁関係にあることを示しているだろう。それではなぜこのような読みが必要なのだろうか。著者は本書を「所与の現実に対して〔中略〕そのつど批判的距離をとることを可能にするものにかんしての調査研究」（15頁）であると位置づけているが、それは著者自身も気づいているように、彼の生い立ちと関係があるだろう。逆にいえば、

全ての人々が彼と同じモチーフを共有できるわけではない。一般に人が歴史に対して持つ関心には、現在の自身の不透明な位置を、歴史・伝統につながることで確かめたいというモチーフが含まれている。たとえば日本の歴史伝承においては、支配者の成功譚よりも非業の最期を遂げた英雄の物語に人気がある。しかし、それは必ずしも権力構造に対する批判精神には結びつかず、結果的に正史を補完し、政治・文化的枠組みに対する人々の帰属意識を促進する役割を果たすことも多い。そのような形で自らの位置を確認しようとしている人々に、「歴史を逆なでする読み」を示すことは、その物語的感興をそぎ、彼らを警戒させる効果しか生み出さないのかもしれない。

しかし、ギンズブルグは「規範の侵犯は〔規範を前提としているかぎり〕それ自体のうちに当の規範を内包しています。が、逆は真ではありません」(241頁)と、自らの立場を根拠づけている。「歴史を逆なでする読み」は「素直な読み」が依拠している文化規範の重要性と共に、その限界をも認識することができる。しかし「素直な読み」しか知らない人々は自らの文化規範の中に閉じこもらざるをえず、それを解体しかねないものに対して自己防衛的に身構えつづけねばならない。文化史研究の分野でいうなら、制度的に承認済みのテキストや文化現象の「価値」(およびその累積としての線的な一国文化史の枠組み)や、その「魂に参入」(小林秀雄)するための「素直な読み」が支配的である間は、「逆なでする読み」は警戒されるだろう。そこでは内向きのアイデンティティ・ポリティクスが作動しており、文化規範を異にする他者との関係という、今日的テーマが存在しうる余地は狭くない。文化史のレベルでこのテーマを追求するなら、一国文化史における支配的要素を、より広域の文化圏における複数の要素の星座図の中に配置しなおすと同時に、一国文化史における周縁的要素を、広域文化圏内における交通の相の下に掘り起こす必要があるだろう。バフチン流に言えば、ポリフォニーとしての比較文化史ということになるだろうが、その中で「逆なでする読み」は大きな役割を果たすことができるのではないだろうか。

「歴史を逆なでする読み」は他者への関心に裏打ちされた営みであり、21世紀の「倫理」的課題とも密接な関係にある。ベンヤミン、バフチン、それにギンズブルグの父親は共に同時代人である。彼らの生涯は苦難の多いものだったが、その経験と引き換えに得た認識は、今後の世界を考える際のヒントに満ちているといえるのではないか。

